2019年応用物理学会春季学術講演会特別シンポジウム
「ここがヘンだよ、日本の研究環境」開催報告

男女共同参画委員会
委員長　小川 賀代

開催日時：2019年3月10日（日）13:00～17:45
開催場所：東京工業大学 大岡山 西2号館 4F W242
参加人数：79名

エルゼビア社が20年以上にわたって12の地域、27の分野の研究業績と男女の割合を分析し、2017年に発表した「Gender in the Global Research Landscape」[1)]では、9 か国/地域（オーストラリア、ブラジル、カナダ、デンマーク、EU（欧州連合）、フランス、ポルトガル、英国、米国）で、研究者人口の40%以上を女性が占めているとの報告がありますが、日本は依然として20%に留まっており、他国と比べ、とても低い状況にあります。また、同報告書では、日本における留学生の流入と流出の割合が、他国に比べ、流出が多いという指摘もあります。このような状況を招いている日本の研究環境に、どのような課題があるのでしょうか？そこで、本シンポジウムは、多くの女性や外国人研究者・留学生の育成に携わり、そして協働してきた研究者の視点から、日本の研究環境の課題を掘り下げ、改善のための糸口を見つけることを狙いとして「ここがヘンだよ、日本の研究環境」と題し、企画・開催されました。前半の講演は、会場が満席で立ち見が出る程盛況であり（図１）、後半のパネルディスカッションは、フロアも交えて活発な質疑応答が行われました。（図２）

基調講演である高橋雅英氏（名古屋大学副総長）の「名古屋大学における女性研究者活躍推進に向けた取り組みと課題」では、名古屋大学の女性研究者推進の取り組みの紹介に先立ち、ご自身の家庭内での男女共同参画、ご自身の研究室における女性研究者育成について紹介され、家庭、職場、社会が一体となって男女共同参画を推進することが大切であることを説かれました。また、性別によらず「個性が輝く」ことが新しいイノベーションを作り出すと提言され、名古屋大学ではハード面では保育園だけでなく学童保育所を開設し、ソフト面では、「5時以降や休日の会議を原則禁止」を含むワークライフバランスアクションプランを提案していることを紹介されました。これらの活動を通し、女性教員比率が 29%（2016 年）になりましたが、数物系の女性教員が依然として低い状況にあることが課題であることも示されました。

もう一人の基調講演である加藤一実氏（産業技術総合研究所理事）の「私の歩んだ道、溶液化学を基軸にしたナノ強誘電体の開発」では、ご自身の研究の紹介と共に、研究者としてのキャリア（留学経験含む）や研究室の主宰者としての歩みも示され、常にダイバーシティを受け入れた研究環境の中で成果を出されてきたことを紹介されました。また、産総研のデータ分析から、開発者の中に女性が含まれている特許の方が、実施率が高くなるという結果が得られたことを示され、ダイバーシティはイノベーションの原動力になることを裏付けられました。さらに、産総研のダイバーシティ支援室が行っている取り組みの一つとして、人材育成をあげられ、若手研究者

が産総研の理事長と直接対話することで、意識啓発が進むことも紹介されました。

大学教員の経験もある坂根シルック氏（フィンランド社会文化研究家）の「日本とフィンランドにおける『働き方』の違い　～社会の背景や価値観から考える～」の講演では、フィンランドの歴史的な紹介から始まり、フィンランドの労働環境について紹介されました。そして、日本との価値観の違いにも触れ、フィンランド人は「人は人、自分は自分」の精神を子どもの頃から育てられているため、互いの違いを認め、ありのままの相手を受け入れる価値観を持っているのに対し、日本人はカテゴリーに分けたがり、カテゴリーが同じだと安心する傾向があると述べられました。他にも、休みに関する価値観、仕事の捉え方の違いにも触れられました。フィンランド人の坂根先生には生きにくいように感じる日本ですが、日本人には「気遣い」があり、この気遣いが好きで 23 歳で来日してからずっと日本に留まっていると述べられました。

2015 年度に男女共同参画委員会の委員長を務められた根本香絵氏（国立情報学研究所教授）の「海外へ行くと研究が捗る？　～研究の効率を上げる環境とは～」の講演では、歯に衣着せぬご発言で、日本の研究環境における問題を指摘されました。最初に挙げられた問題提起は、日本において多様性は「心地よくないもの」ではないか、ということでした。この背景には、「変える」ということの良さを実感していないことや、「言わなくてもわかる」ということが過度に重要視されていること、違いを受け入れることの訓練がされていないことがあると指摘されました。その上で、これらを乗り越えるためのステップとして「言語化して伝える」、「論理的に話す」、「『今』と『その先』を重視する」を提言されました。

休憩時間を利用して、「NEWMAP Coffee Break」も開催しました。（図３）短い時間ではありましたが、飲み物を片手に参加者間の交流を図ることができました。また、今回は、新しい試みとして、パネルディスカッションの質問を web アプリ［respon］[2)]でも受け付けるために、この時間を利用して入力をお願いしました。

シンポジウムの後半は、講演者だけでなく、応用物理学会会長の財満鎭明氏にもパネリストとして加わって頂き、小川の司会によりパネルディスカッションが行われました。パネルディスカッションは、本稿の冒頭で示したエルゼビア社の「Gender in the Global Research Landscape」で報告された女性研究者の数、留学生の流出の方が多く流入が少ないデータを示し、日本の男女共同参画やダイバーシティが遅れている要因について、パネリストからご意見を伺うところからスタートしました。坂根氏は日本の研究室の異質性（「言わないでもわかる」という文化故に、何を求められているかわからない）を指摘し、加藤氏は日本人の意識の問題（留学中は「雇われている」という緊張感が常にあったが、日本人の研究者からは感じられない）を挙げ、髙橋氏はトップの意識が重要であると述べられました。これを受け、フロアからも多数の意見や質問が出され、議論は白熱していきました。ワークライフバランスについても議論が及び「研究が好きだから 24 時間の殆どを研究に費やしていいじゃない」という学生に対し、将来を見据えて「家庭ができたらどうするのか」と大人が問いかける必要があるのではないか、との意見も出されました。これを受け、研究室の主宰者、組織の管理者としてできることは何かを伺ったところ、財満氏は、今までは自分で判断しなくてもよい社会だったが、これからは、ある所まで教えたら後は自立でき

るように放置した方がよいのではないかと述べ、根本氏は、「ダメ」という一言でも、どこがダメなのか言語化する必要がある、と述べられました。フロアにいる留学生が多く在籍している研究室主宰者からも、毎朝朝礼を行い研究室内の交流のきっかけをつくっているとの取り組みも紹介されました。

他にも、ここでは報告しきれないほどの多くの意見交換が行われ、今日の日本人を形成した日本の教育の在り方の是非、若い人のモチベーションの低下、日本人の自尊感情、博士の進路選択についてなど、多方面に議論が発展していき、1 時間半があっという間に過ぎていきました。最後に、本シンポジウムを通して、意識の違い（男女差、文化差）を理解し、協働していくための方策としては、「対話をしていくことで異文化を受け止める」、「ダイバーシティのある環境を意識してトップが作っていくことが大事」であることを確認し、成功裏に終わることができました。

男女共同参画・ダイバーシティの実現へは、まだ道半ばです。今後も男女共同参画委員会では、委員会での活動を通じて抽出された課題について議論し、シンポジウムや NEWMAP 懇親会の開催、Facebook[3)]などの活用により、情報発信をして参りますので、今後も皆さまの積極的な参加をお待ちしております。

1) https://www.elsevier.com/research-intelligence/campaigns/gender-17

2) https://respon.jp/

3) https://www.facebook.com/groups/AP.NEWMAP/

図 1　講演の様子

図 2　パネルディスカッションの様子

図 3　NEWMAP Coffee Break の様子